

日本イギリス哲学会関東部会 第 89 回研究例会

日時 2012 年 7 月 7 日 (土) 14:00～17:15

場所 東京大学本郷キャンパス法文二号館 2 階・哲学研究室

プログラム

14:00～15:30 (質疑応答を含む)

ヒュームの「一般的観点」

矢嶋 直規 (国際基督教大学)

15:45～17:15 (質疑応答を含む)

バークリともう一人のモリニュークス状況の人

野村 智清 (東京大学大学院)

関東部会担当

一ノ瀬正樹 (ichinose@l.u-tokyo.ac.jp)

山岡龍一 (yamaoka@ouj.ac.jp)

(◎を@にお直してください)

【会場案内】

本郷キャンパス法文2号館



最寄り駅	所要時間
本郷三丁目駅（地下鉄丸の内線）	徒歩 8 分
本郷三丁目駅（地下鉄大江戸線）	徒歩 6 分
湯島駅又は根津駅（地下鉄千代田線）	徒歩 8 分
東大前駅（地下鉄南北線）	徒歩 1 分
春日駅（地下鉄三田線）	徒歩 10 分

日本イギリス哲学会関東部会第 89 回例会報告要旨

2012 年 7 月 7 日 東京大学本郷キャンパス

ヒュームの「一般的観点」

矢嶋 直規

ヒュームの *A Treatise of Human Nature* (1739-40) (以下『論攷』と記す) は多様な読み方を許す書物である。そのことは同書が、中心的主題として知覚や因果を論じながら、「知覚論」とも「因果論」とも題されていないことから明らかである。それゆえ私たちが『論攷』を読解する際にどのような立場を選択すべきかについて考察することには意味がある。その立場は、第一に『論攷』の三巻全体に通底するものでなければならず、また“Human Nature”にかかわるものでなければならず、さらには副題にある「道徳的諸主題への実験的方法の導入」に即したものであるべきである。

こうした観点から、本報告は『論攷』全巻を道徳論として読解することが可能であると主張しようとするものである。とりわけ私はヒュームが彼以前の“human nature”の概念を「人間本性」から、「人間に固有の自然」へと転換し、ホッブズからハチソンに至る「人性論争」に独自の仕方では決着をつけていると考える。ヒュームがハチソンの「人間本性」を批判する理由は、その概念が、知覚とは別の仕方では存在する非経験的な原理であり、それは経験的に正当化できない因果作用に基づいているからである。その立場を克服するためにヒュームは、人間本性を、知覚によって構成される人間の精神の全体としての「人間に固有の自然」へと転換したのだと言える。ヒュームの因果論のコペルニクスの転回の本質もその点に見いだされる。

ヒュームの一般的観点は一般観念に基づいている。また一般観念は連合によってもたらされる。本報告では、ヒュームの一般的観点が連合の原理に基づき、自然的世界と道徳的世界を人間に固有の自然として統一する規範原理であることを主張したい。

・本報告は本年 2 月に上梓した拙書『ヒュームの一般的観点：人間に固有の自然と道徳』（勁草書房）に基づくものである。また本報告は科研費の助成を受けて行われる。

バークリともう一人のモリニュークス状況の人

野村 智清

ロックは 1694 年に刊行した『人間知性論』第二版第九章第八節に、ある思考実験を書き加えている。この生来の盲人に関する思考実験は、その発案者であるアイルランド人 William Molyneux の名前をとって、「モリニュークス問題」と呼ばれるようになっていった。近年では Atherton や Fields の解釈でも見られるように、特にバークリ解釈において、この思考実験の登場人物である生来の盲人も発案者の名をとって「モリニュークス状況の人」(The Molyneux Man) と呼ばれている。先に挙げた二名や Morgan、Degenaar、Evans、一ノ瀬そして信原などの解釈から明らかなように、「モリニュークス問題」は昨今の多くの解釈では知覚を巡る文脈で捉えられてきた。

「モリニュークス問題」の影響をもっとも大きく受けた哲学者の一人としてバークリを挙げることができる。彼は『視覚新論』において再三にわたって「モリニュークス状況の人」に言及している。これらの言及のほとんどは昨今の多くの解釈と同じように知覚を巡る文脈においてなされている。しかし、『視覚新論』148 節にみられるように、「モリニュークス状況の人」は神学的な文脈でも言及されている。つまり『視覚新論』には昨今の多くの解釈と共通する知覚を巡る文脈での「モリニュークス状況の人」とは別個に、神学的な文脈に置かれたもう一人の「モリニュークス状況の人」が居ると考えられる。

本報告ではこれまで注目されることの少なかったもう一人の「モリニュークス状況の人」を Synge、Browne そして King といったアイルランドの哲学者たちの思索を参照しつつ考察する。そしてこの考察を踏まえて、もう一人の「モリニュークス状況の人」と知覚を巡る文脈での「モリニュークス状況の人」との関係も分析する。これらの考察や分析を通して、本報告ではバークリにとって「モリニュークス問題」がどのような問題であったのかを明らかにすることを目指す。